

旧サン・ピエトロ聖堂アプシス装飾の 年代と図像解釈

——「トラディティオ・レギス（法の授与）」図をめぐる——

La datazione della decorazione absidale della basilica di S. Pietro e <Traditio Legis>.

山田 香里

Kaori YAMADA

ローマ、ヴァティカヌスの丘で4世紀前半に建築が始まった旧サン・ピエトロ聖堂は、キリストの使徒の筆頭であるペトロの墓（とされる場所）の上に建造された殉教者記念聖堂であるⁱ。聖堂内部、アプシス、コンカのモザイク装飾のテーマは、決定的な資料に欠けるものの4世紀後半に流行した「トラディティオ・レギス（法の授与）」図であったと考えられている。本稿では、旧サン・ピエトロ聖堂アプシス周辺の建築と装飾年代を、その場所に残された複数の銘文や考古学資料に基づいて考察し、当時のローマ教会が置かれていた状況を分析しながら、そこに描かれていたはずの「トラディティオ・レギス」図の図像内容をあきらかにすることを目的とするⁱⁱ。

1. 旧サン・ピエトロ聖堂の建築年代
 - 1-1. 聖堂内に残された銘文と建築年代
 - 1-2. アプシスのモザイク装飾の制作年代
2. 旧サン・ピエトロ聖堂のアプシス装飾が行われた時代のローマ教会
 - 2-1. ニカイア公会議とアレイオス論争の行方

2-2. 反アレイオス主義とローマ教会

3. 「トラディティオ・レギス（法の授与）」図について

3-1. 「トラディティオ・レギス」図の概要と研究略史

3-2. 旧サン・ピエトロ聖堂、アプシス装飾について

4. まとめ 旧サン・ピエトロ聖堂、アプシス装飾としての「トラディティオ・レギス」図

1. 旧サン・ピエトロ聖堂の建築年代

1-1. 聖堂内に残された銘文と建築年代

旧サン・ピエトロ聖堂の建造開始は、530年ごろ執筆の教皇列伝*Liber Pontificalis*によれば司教シルウェステル時代（314-335）でありⁱⁱⁱ、クラウトハイマーはコルプスにおいて320年代であるとする^{iv}。建築年代に関する資料は、教皇列伝のほか、現場に残された銘文や考古学資料に関する記述を含む幾つかの文書資料などがある。このうち建設と同時代に記された文書資料はノラのパウリヌスによるものが最古であり、それは395年か396年にサン・ピエトロ聖堂で行われたパンマキウスの妻パウリーナの葬儀とレフリゲリウムに関する記述であるが、この時代にすでにアトリウムが完成していたことが伺える^v。教皇列伝には、司教シルウェステル時代にコンスタンティヌスが聖堂を創建したと皇帝が聖堂に対して行った寄進物のリストが記されている。皇帝は国費で聖堂建築に出資し、私費で寄進を行った。この出資と寄進が同時期におこなわれたかどうかは不明である。寄進物のリストにはギリシア東部からもたらされたぶどう綱文様のついた柱、黄金や銀のシャンデリア、コンスタンティヌスと母ヘレナの名前が記された黄金の十字架、そして、東方一帯の教会管区が記されている。東方一帯の教会管区はコンスタンティヌスがリキニウスを破って帝国東部を掌握した324年9月以降に彼のものとなったので、この寄進は324年9月以降と考えられる。一方、黄金の十字架上の

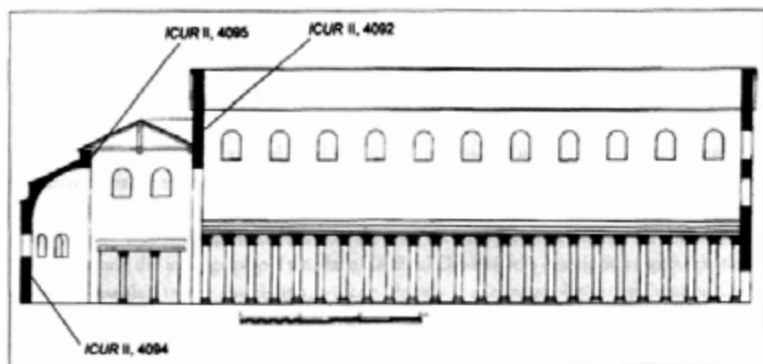


図1 旧サン・ピエトロ聖堂、銘文の配置図 (Liverani, 2008, fig. 1)

銘文には、ヘレナがアウグスタであることが明記されている。

CONSTANTINVS AVGVSTVS ET HELENA AVGVSTA [.....]

HANC DOMVM REGALEM SIMILI FVLGORE CORVSCANS AVLA CIRCVMDAT^{vi}

アウグスタは324年に彼女に与えられた称号であるから、寄進は324年9月以降、ヘレナの死亡した328年か329年までのことと考えられる。ヘレナとコンスタンティヌスは、皇帝の在位20年の機会である326年7月か8月にローマに滞在しており、黄金の十字架の奉納は、この折であったのかもしれない。また、カエサリアのエウセビオスを書き遺した『コンスタンティヌスの生涯』には、326年ごろにコンスタンティヌスがエルサレム司教マカリオスにあてた手紙にエルサレム教会に対するサン・ピエトロ聖堂に対するものと類似した奉納リストが記されている^{vii}。そこからサン・ピエトロ聖堂とエルサレムの聖墳墓教会の建築は同年代に並行して行われていたとリチャード・ジェムは指摘している^{viii}。

この黄金の十字架上の銘文のほか、聖堂内アプシス周辺に記された3つの銘文が知られている(図1)。このうちトランセプトの壁面に記された銘文は16世紀、新聖堂の建築の時まで確認する

ことができた。

QVOD DVCE TE MVNDVS SVRREXIT IN ASTRA TRIVMPHANS
HANC CONSTANTINVS VICTOR TIBI CONDIDIT AVLAM^{ix}

この銘文ではコンスタンティヌスに VICTOR なる称号を冠している。コンスタンティヌスが324年、クリュソポリスにおける対リキニウス戦への勝利の結果、帝国を再統一できたことから与えられた称号であるので、銘文の年代は324年以降と想定される。また、この銘文では黄金の十字架上の銘文と同じ AVLA という言葉が用いられている。4 世紀において AVLA はバシリカを指す言葉であり、ジェムによればトランセプトの銘文と十字架の銘文とは呼応していて、この銘文の年代は黄金の十字架のそれと同様324年からあまり離れてはいない^x。したがって、トランセプト周辺に関しては324年からあまり離れていない年代、恐らくはコンスタンティヌスの訪問時326年には完成していたものと思われる。

アプシスの凱旋門型壁面には壁画とともに残された銘文があった^{xi}。

...CONSTANTINI...EXPIATA HOSTILI INCVRSIONE...

ここでは、コンスタンティヌスの名と敵の攻撃に関する言及があるが、クラウトハイマー^{xii}とリヴェラーニ^{xiii}は、これを322年のサルマン人の侵入の攻撃とする。デ・ロッシとグアルドゥッチ^{xiv}は、342年のコンスタンスによるフランク族への勝利としている一方、ジェムは340年、コンスタンティウス 2 世によるコンスタンスへの攻撃としている^{xv}。

そしてアプシス、コンカの下部には9世紀の巡礼者向けガイド、アインシーデルンの巡礼ガイドでも言及されている献堂銘文が記されていた。

IVSTITIAE SEDES FIDEI DOMVS AVLA PVDORIS
 HAEC EST QVAM CERNIS PIETAS QVAM POSSIDET OMNIS
 QVAE PATRIS ET FILII VIRTVTIBVS INCLYTA GAVDET
 AVCTORVMQVE SVVM GENITORIS LAVDIBVS AEQVAT^{xvi}

銘文中のPATRIS ET FILII（父と子）という言葉の解釈で、アプシス壁画の年代設定や、アプシス壁画の内容に関する幾つかの説が現在まで提示されているが、それは大きく分けると以下の三つとなる。

- 1) 以前から広く認められてきた説は、父と子をコンスタンティヌスとその子、3人の息子のうちの一人を指すものとする説である。PATRIS ET FILIIは、銘文中の他の語AVCTOR（創立者）とGENITOR（完成者）に対応しているため、この父子がバシリカの創立者であり、完成者である。3人の息子のうちコンスタンティヌス2世（337-340）はローマを含む帝国の西側を支配することがなかったため、ここでは除外される。コンスタンス1世（337-350）の場合は、フランク族への勝利の後（342年）以降、コンスタンティウス2世（337-361）の場合は、彼が西側を支配することになった352年から361年11月までが銘文制作の年代と考えられる。グアルドゥッチは、前述のアプシス凱旋門型壁面の銘文がこの銘文と同時代に記されたと考えたことから、コンスタンスのフランク族への勝利のあと（342-344）とする。一方、クラウトハイマー^{xvii}やデ・ブラーウ^{xviii}は、この銘文をコンスタンティウス2世時代に制作されたもの、したがって、子が示すのはコンスタンティウス2世であるとする。
- 2) リヴェラーニは近年、コンスタンティウス・クロルスとコンスタンティヌスの父子であり、したがって、モザイクはコンスタンティヌス時代に遡ると指摘している^{xix}。彼は、教皇列

伝におけるサン・ピエトロ聖堂創建の記述中の camera の語をアプシスだけでなくその周辺も指す言葉と解釈したことから^{xx}、アプシス周辺の整備は全体が同時期に行われたと考え、前述の凱旋門型壁面の銘文とこの銘文は同時期（322年以降）である、とする。ここで教会の「創立者」という言葉は、「子」とパラレルであり、コンスタンティヌスがこの教会の創立者である以上、「子」の「父」は、コンスタンティウス・クロルス以外にありえないとする。現在のところ、同意見の研究者は見当たらない。

- 3) ライスハールトは、父と子を三位一体の父なる神と子なるキリストと理解して、論文の出版当時論争を呼んだ^{xxi}。彼によれば、これは、反アレイオス主義的な状況の中、司教リベリウス時代（352–366）に記された銘文である。アレイオス主義とは、アレクサンドリアのアレイオスによる父なる神に子なるキリストは創造された、とするキリスト従属説であるが、このアレイオス主義の台頭に反発して父と子の同一本質を銘文中で強調している、と考える。この説は出版時に物議を醸し、クラウトハイマーはコルプスにおいて一旦は受け入れたものの^{xxii}、のちにこの説に対しては否定をしており^{xxiii}、現在では支持されていない^{xxiv}。

この銘文中で創立され、完成されたのは、銘文中冒頭の IVSTITIAE SEDES、FIDEI DOMVS、AVLA PVDORIS である。クラウトハイマーによれば、この三つの言葉は同じ事柄、ecclesiaを暗示しているという。さらに、銘文中の HAEC QVAM CERNISは、この銘文とともに同時期に描かれたアプシス、コンカのモザイク壁画を指すとする。クラウトハイマーは、モザイク壁画の主題を「トラディティオ・レギス」図と考え、この図の下に記された銘文はモザイク壁画をもたらししたコンスタンティ

ウスを称賛したものと評する^{xxv}。

アプシス周辺の建築年代を推定する資料は銘文の他に、アプシス周辺から1594年時点で発見されたコンスタンティヌス1世、コンスタンティヌス2世、コンスタンス1世の硬貨^{xxvi}、コンスタンスの名を記した複数の押し型の刻印、bolliがある^{xxvii}。したがってアプシス周辺は、創建当時の建築がそのままであったわけではなくコンスタンス時代に整備されたものと考えられる。ジェムはこの点を重視し、アプシスの改築とアプシス周辺の銘文を含んだモザイク装飾をコンスタンス1世時代のもの、とりわけコンスタンスがローマに滞在した340/1年に続く年代と同定している^{xxviii}。

1-2. アプシスのモザイク装飾の制作年代

さて、アプシス、コンカの下部に記された銘文が上部のモザイク壁画とともに記されたのであれば、アプシス装飾の年代は、ジェムによれば340年代の早い時期、クラウトハイマーによれば351-361年のあいだとなる。

アプシス、コンカの装飾は、聖堂建築直後にはアイコニックな主題のものが配されており、しばらくたってから人物像を含んだ装飾に作り変えられたとかねてより考えられており、その年代はこのように諸説あるものの、教皇列伝の記述などから遅くとも司教リベリウス時代（352-366）までには完成していたと思われる^{xxix}。

教皇列伝の別の記述によれば、レオ1世（440-461）の時代に、バシリカの改修が行われている^{xxx}。この際アプシスは改築ではなく補修程度の工事が行われた。セウエリヌス（640）時代にもアプシスを改修したことが記されている^{xxxi}が、すでに言及した4世紀のアプシス、コンカ下部の銘文が少なくとも9世紀までは確認できていたため、アプシスの壁画を作り変えたというわけで

はなく一部補修であったとする説が根強い。そして、教皇インノケンティウス3世（1198-1216）時代にはアプシス装飾は全面的に改修された^{xxxii}。この時の装飾が16/17世紀の新聖堂建築に伴って旧聖堂が破壊されるまでそこに残されていたものであり、破壊前に制作された素描により装飾の詳細を知ることができる^{xxxiii}。したがって、アプシス、コンカのモザイク装飾は4世紀中葉に制作されたものが13世紀初頭までそこにあったと考えられる。

2. 旧サン・ピエトロ聖堂のアプシス装飾が行われた時代のローマ教会

2-1. ニカイア公会議とアレイオス論争の行方^{xxxiv}

旧サン・ピエトロ聖堂の建築が開始された320年代、教会では第1回の公会議であるニカイア公会議が皇帝コンスタンティヌスの主導のもと325年に開催された。コンスタンティヌスは324年にリキニウスを破って帝国の東側領土を獲得したが、その時点の東方圏の教会は、キリスト論争で分裂の危機にあった。皇帝は論争の解決と全教会の一致を求めて公会議を開催することを決定した。コンスタンティヌスの望みは、教義云々よりもまずはこの「教会の一致」にあったと考えられる。ニカイア公会議で議論となったアレイオス論争とは、アレクサンドリアのアレイオスが唱えたキリスト従属説に関する論争のことであるが、アレイオスは当時のアレクサンドリア司教アレキサンデルの怒りを買って318年にアレクサンドリアから追放される。しかしその時点ではすでにエジプトの諸教会にこの教説が広まっていた。そして、ニカイア公会議においてはアレイオスの教説は異端とされる。しかし、アレイオスにはかつてアンティオキア教会で共に同じ師に学んだ同僚が特に帝国東側の教会に大勢おり、のちに、これら同僚たちが皇帝に対してアレイオス復権に向け働きかけを行うことになる。これにより皇帝はアレクサンデルの死後アレクサンドリア司教となった

アタナシオス（328-373）に対し、アレクサンドリア教会におけるアレイオスの復権を求めていくことになる。アレイオスはこの時点で自説を撤回していたが、おそらくアタナシオスの目には、それが真実とは映らなかったであろう。アタナシオスは生涯にわたってこの要求を受け入れることはなかった。それゆえ5回にわたって司教座からの追放の憂き目にあっている。このようにアレイオス論争は、単なる教義論争ではなく、教会の一致を求めた皇帝と教義の正当性を主張し続けたアタナシオス、教会間の権力争いをした親アレイオス派司教たち、と思惑の異なる人々の間の複雑な抗争でもあった。関係者の思惑がそれぞれ異なるが故に、解決することは困難であった。

こうしたアレイオス論争をめぐる政治を巻き込んだ聖職者たちや教会間の闘争は、当初西側のローマ教会には関係がなく、実際ニカイア公会議にローマ司教は参加していない。またアレイオス論争の教義的な面に関しても西側の神学者たちは関心が薄かったことが伺える。父と子の本質が同質である、という公会議で定められた教義の正当性を殊更に主張する必要性は公会議直後のローマ教会にはなかった。しかし、アレイオス論争のその後の展開は、ローマ教会をも巻き込むこととなった。ニカイア公会議を主催し、原ニカイア信条の文言決定に介入もしたと言われるコンスタンティヌスの身近には親アレイオス派の司教たちがおり、のちに皇帝はこれに傾いたと考えられているし、コンスタンティヌスの後継者たる三人の息子のうち、コンスタンスを除く二人もアレイオス主義者であって、親アレイオス派の司教たちと関係が深かったからである。

2-2. 反アレイオス主義とローマ教会

反アレイオスの立場であったアレクサンドリア司教アタナシオスの生涯の年譜を見ていくと興味深い点が見受けられる。彼はコ

ンスタンティヌスが死去した337年、皇帝によって追放中であり（第1回）トリニアに滞在していた。皇帝の死をきっかけとした後継者コンスタンティウス2世による恩赦でアレクサンドリアに戻ることができたが、宮廷内に残っていた親アタナシオス派であった皇帝の親族は、コンスタンティウスによってすべて殺害されている。また、皇帝の即位後まもなく、親アレイオスの中心人物であり宮廷内でも強力な影響力を有していたニコメディアのエウセビオスが、追放された司教パウルスの後、338年コンスタンティノポリスの司教座についた。親アレイオス（反アタナシオス）の司教たちは、様々な嫌疑をアタナシオスにかけて、なんとか失権させようとしており、彼はこれ以降、西方に支持を求める以外になかったようである^{xxxv}。アタナシオスの第二回の追放は339年から346年のことだが、この間に彼はローマ司教ユリウス1世（337－352）の招きでローマの教会会議に赴いた。これは341年の出来事で、ニカイア正統派信仰の擁護者であった西の皇帝コンスタンスもローマに滞在中であった。この教会会議ではアタナシオスの嫌疑を晴らし、原ニカイア信条を確認するとともに、アタナシオスの罷免を不当なものであると宣言した。アタナシオスが所属していたアレクサンドリア教会は東方教会だが、他の東方諸教会よりもローマ教会と関係が深く、ローマ司教はアレクサンドリア司教の人事に東の教会が介入することを嫌っていたのである。この会議の結果をユリウスはアンティオケアのエウセビオス派司教に書簡で伝えた。書簡到着前にエウセビオスは亡くなったが、エウセビオス派は同年、アンティオケア大聖堂の献堂式の際に教会会議を開き、アタナシオスの罷免を確認、反ニカイア信条を作成した。他方343年に東の皇帝コンスタンティウスはサルディカ（ソフィア）で教会会議を開き、アタナシオスを復権させ、混乱した事態を収束させ教会に一致をもたらせようとした。このように、ニカイア公会議後の教会は、なおもアレイオス主義をめぐって分裂していた。

350年に正統派信仰の擁護者であった皇帝コンスタンスがマグネンティウスに倒され、352年にアレイオス主義者のコンスタンティウス2世がこれを倒して帝国の西方も手にいれると、ローマ司教リベリウス（352–366）は皇帝よりアタナシオスを非難し、これを支持しないように迫られた。これにより341年の教会会議で確認した原ニカイア信条と、アタナシオスが正当なアレクサンドリア司教であることの確認は、西側の教会にとって困難なものとなってきたし、アタナシオス自身も西方に支持を求めるのが難しくなってきた。リベリウスは追放される355年までの間に再三アタナシオスを非難するように皇帝より命令を受けていたがこれを受け入れることがなかったため、対立教皇フェリクス2世（355–365）が立てられる。リベリウスが皇帝に恭順を示してローマに帰還するのは358年のことである。旧サン・ピエトロ聖堂のアプシス装飾は前述の通り司教ユリウスカリベリウスの在位中には制作が完了したと推定されるが、この時代はローマ教会にとっては、ニカイア正統信仰を擁護する皇帝のもと原ニカイア信条の堅持とアタナシオス支持の時代から一転しアレイオス派皇帝の圧力に苦しんだ時期と一致している。

3. 「トラディティオ・レギス（法の授与）」図について

3-1. 「トラディティオ・レギス」図の概要と研究略史

旧サン・ピエトロ聖堂のアプシス装飾と考えられる「トラディティオ・レギス（法の授与）」図は、4世紀の後半から5世紀初頭に流行した図像で、そのほとんどがローマで制作されている。明らかに「トラディティオ・レギス」図である、と判明する現存作例は現時点ではおよそ45例ある。その内訳は、モザイク壁画が2例（廟堂と洗礼堂）、カタコンベの壁画が3例、金箔ガラス、ガラス、聖遺物箱などの小作例が7例、カタコンベのロクルス板の線刻が1例、洗礼堂内のストゥッコ装飾が1例、残りは石棺浮彫彫刻の



図2 ローマ、コンスタンティナ廟堂、南側アプシス

事例である^{xxxvi}。

基本的にはペトロ、パウロ、キリストからなる3人図像であり、中央に右手を挙げたキリストが立ち、彼の左にいる十字架を背負ったペトロに開かれた巻物を与える。キリストから見て右側にいるパウロはアクラマティオ（賞賛）のポーズをとる（図2）。彼らのポーズは、いずれも皇帝美術で皇帝と臣下を表現する際によく用いられたもので、巻物を授与する、という主題からも、皇帝美術の影響を大きく受けたものと考えられている^{xxxvii}。巻物に記された銘文も、皇帝美術の影響を受けていると考えられており、「トラディティオ・レギス」図の初期の研究は、巻物の銘文研究からの図像解釈が多く見られた^{xxxviii}。右手をあげるキリストのポーズ、アクラマティオのパウロのポーズ、両手を服の下に隠すペトロのポーズはいずれも宮廷内の作法に依拠したものであり、巻物の授与という行為も、宮廷内で皇帝から臣下への權威の委譲の儀式であることから、皇帝美術の表現形式を借りて、ペトロへのキリストの

宣教の権威の委譲を意味する図と解釈された^{xxxix}。さらにペトロが初代ローマ司教とみなされていることから、ペトロの首位権、ひいてはローマ司教の首位権を主張した図である、という説も広く受け入れられている^{xl}。

一方「トラディティオ・レギス」図の三人図像の周辺に描かれるものとしては、キリストの足元に4本の川が流れる丘、神の小羊、画面両端になつめやしの木、キリストの背景の虹色の雲、キリストの両側の複数の羊が挙げられ、いずれも聖書における樂園の表象であったり、黙示録的な表現であったりする。ここから、1960年代以降の研究では、特にこの黙示録的な表現に着目し、終末におけるキリスト顕現図と理解する研究が多く見られた^{xli}。

また近年、ビスコンティは、「トラディティオ・レギス」図を、一連のペトロ物語サイクル表現の成立の流れの中で誕生したと述べている。3、4世紀のキリスト教美術におけるペトロの物語表現は、キリスト受難伝と関連して「ペトロ否みの予告」「洗足」「ペトロの逮捕」「泉の奇跡」などが挙げられるが、「ペトロの泉の奇跡」はモーセの泉の奇跡の表現と酷似している。モーセには他に「十戒の授受」という、律法の授与場面があり、ペトロにも並行して「トラディティオ・レギス」図という授与場面が作成されたのではないかと指摘している。モーセへ与えられたのは古い律法であり、ペトロへ与えられた法はキリストのもたらした新しい律法である。ビスコンティは、このペトロへの法の授与図に聖書の典拠があると指摘しており、それが第一コリント15章の復活のキリストがケファ（ペトロ）やパウロに現れている、とするパウロ自身による記述である。さらに、石棺上で「トラディティオ・レギス」図と「アナスタシス（勝利の十字架）」図が交換可能な図像であったことを鑑みると、「トラディティオ・レギス」図はアナスタシスの持つ「復活のキリスト」という意味を含有しているとし、それゆえ「トラディティオ・レギス」図はキリストの復活の秘蹟とその

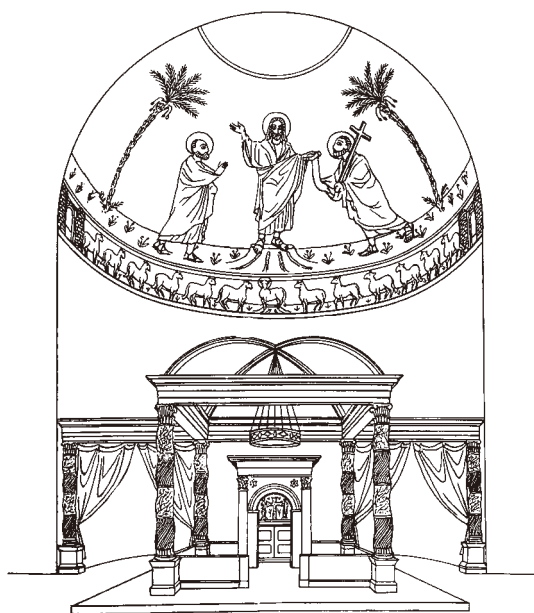


図3 旧サン・ピエトロ聖堂、アプシス再構成図

後の使徒たちへの顕現を表現したものと考えられるという^{xiii}。

3-3. 旧サン・ピエトロ聖堂、アプシス装飾について（図3）

決定的な資料が残されていない中、旧サン・ピエトロ聖堂のアプシス装飾が「トラディティオ・レギス」図であると多くの研究者が考えるが理由のうち大きなものは以下の四つである。まず第一に、この聖堂が殉教者ペトロの墓の上に作られた殉教者記念聖堂であることだ。聖堂アプシスのコンカには聖堂内で最も重要な壁画を配するが、サン・ピエトロ聖堂の場合、ここには必ずペトロが主役となる壁画が描かれなければならない。画面の中央にキリストが描かれるがキリストの持つ巻物はペトロに与えられており、二使徒が共に描かれてはいるものの、明らかにパウロよりペ



図4 ヴェネツィア、考古学博物館蔵、象牙製聖遺物箱、蓋

トロの方が重要な役割を担う。第二にはこの図像が4世紀後半から5世紀初頭のローマ文化圏という限られた年代、地域において急速に伝播しそして消滅していったことにある^{xliii}。おそらく、「トラディティオ・レギス」図のプロトタイプたる作品は、非常に影響力のある場所に描かれた作例であったのであろう。そして、6世紀のサンティ・コスマ・エ・ダミアノ聖堂や9世紀のサンタ・ブラッセーデ聖堂、サンタ・チェチリア聖堂といった教皇による聖堂アプシス装飾に、あきらかに「トラディティオ・レギス」図から派生した図が描かれている。そこで、「トラディティオ・レギス」図のプロトタイプたる作品は、その時点で教皇が聖堂装飾のモデルにするにふさわしい場所に未だ存在していたと考えられる。

第三に、旧サン・ピエトロ聖堂のアプシス装飾が「トラディティオ・レギス」図であるとする研究者の最大の根拠としてヴェネツィ



図5 ヴェネツィア、考古学博物館蔵、象牙製聖遺物箱、側面

アの考古学博物館に所蔵されている象牙製聖遺物箱、通称サマゲールの象牙製聖遺物箱が挙げられる^{xliv}。この聖遺物箱上には旧サン・ピエトロ聖堂のアプシス周辺が写し取られていると考えられている。蓋にはプロトタイプから直接写し取られた「トラディティオ・レギス」図が描かれ（図4）、4側面には明らかに教会堂内部を示す建築モチーフが描かれている（図5）。4側面は水平方向に三つに分割され、中段の狭い空間には街を出立する羊たちの行列が描かれている。建築モチーフに関していえば、教皇列伝の記述との一致から、背面の装飾はサン・ピエトロ聖堂の内部を表現していることが指摘されている。この箱には、蓋にサン・ピエトロ聖堂のアプシス装飾が、側面にはアプシス下部に配された羊



図6 旧サン・ピエトロ聖堂、アプシスの模写（グリマルディ、cod. barb. lat. 2733）

の行列の帯があり、そして、前面部に教会堂内部が描かれていると、多くの研究者が指摘している。これは明らかに教会堂内部の空間表現だが、細部が教皇列伝が記す、コンスタンティヌスによるサン・ピエトロ聖堂への寄進物のリストと一致する。また、箱の背面部には空の御座が描かれており、これはアプシス下部の装飾を写し取ったものだという^{xliv}。

第四に、16世紀に新聖堂の建築に伴い破壊された旧聖堂のアプシス、コンカのモザイク装飾の模写が挙げられる（図6）。これは、前述の通り、13世紀、インノケンティウス3世の治世下で行われたアプシス装飾の改築の際の壁画である。教会堂内部でこのような改築が行われる際、新しく施される装飾は、そこに以前あったものをある程度踏襲して制作される。壁画は上下二段の区画に分

けられており、下段には中央に4本の川が流れ出る丘に立つ神の仔羊、その両側にはエルサレム、ベツレヘムの都市を出立し仔羊に向かって歩みを進める合計12頭の羊が描かれる。上段の大きな区画には、坐像のキリストの両側に立像の二使徒、ペトロとパウロが配される^{xlvi}。13世紀頃のローマの聖堂アプシス装飾は、大人数で構成されるのが通例であり、サン・ピエトロ聖堂のように三人図像は稀であることから、この図像の構成も4世紀のアプシス装飾を踏襲していると考えられる。また、「トラディティオ・レギス」図のプロトタイプに依拠すると考えられる複数の作例において、羊の行列図が見られることから、基準となった作例は聖堂装飾であったと考えられる。

4. まとめ：旧サン・ピエトロ聖堂、アプシス装飾としての「トラディティオ・レギス」図

「トラディティオレギス」図が旧サン・ピエトロ聖堂に最初に描かれたのであるとすれば、それはどのような意図を持つ図像であるのだろうか。前述のアプシス装飾の年代設定とともにここで再考したい。

旧聖堂のアプシス周辺は、皇帝コンスタンス時代以降に整備され、その後アプシスにモザイク装飾がもたらされた。これをジェムは340年代と想定し^{xlvi}、320年代から続いた聖堂建築の最後の段階であるかもしれない、とする。一方、クラウトハイマーは皇帝コンスタンティウス2世時代とする。前者の場合、アプシスの壁画と共に記された銘文はコンスタンスを賛美したものとなるし、後者の場合は、コンスタンティウスを賛美したものとなる。コンカの壁画は、キリストも二使徒も皇帝美術に依拠したポーズで描かれており、これに先立つ時代の皇帝賛美美術を想起させる。

アプシスの壁画である「トラディティオ・レギス」図は（1）ローマ教会へその宣教権威を渡す至高の存在であるキリスト（2）

初代ローマ司教ペトロへの巻物の授与を通じたローマ司教の首位権（３）終末論的な復活の秘蹟（４）終末時におけるキリストの顕現、を表現していたと思われる。この場所は、殉教者、使徒ペトロの墓の上にあるのだから、この図は殉教者を讃える葬礼美術的意味合いも含有していただろう^{xlvi}。旧サン・ピエトロ聖堂のアプシス装飾の年代が340年代であれ、350年代であれ、まずここで訴える内容は至高のキリストの表現から原ニカイア信条の正当性を示すことであろう。画面の中心で天国の４本の川が流れる丘の上に立つキリストは神と同質の至高性を示している。この点で、子なるキリストを神の被造物としたアレイオス主義に対して、キリストも神と同一本質を持つもの、というニカイア正統派信仰を持つローマ教会の立場を暗に示していると思われる。キリストがとるポーズは、アドロクティオ、と呼ばれる皇帝の演説ポーズである。皇帝と同じ姿で、ローマ教会の創始者とされる使徒ペトロに巻物を渡し宣教の権威を委譲する。これは、皇帝美術の表現方法を借りてキリストの至高性を示すものと一般に考えられるが、もしこれがクラウトハイマーが言うように、コンスタンティウス２世の時代、司教リベリウスが皇帝に屈服したのちに描かれたのであるとすれば、キリストを皇帝を描くように表現することで、皇帝とキリストを共に至高のものとして（凱旋門型壁面の銘文とともに）賛美していたのかもしれない。そして、巧みな表現方法でニカイア信条に記されたキリストと神の同一本質を暗示しているのではないか。また、新しい律法の巻物を初代ローマ司教とされる使徒ペトロに渡し、ローマ司教の首位権を主張している。そして、周辺に描かれたナツメヤシの木、４本の川が流れる丘、神の仔羊といった黙示録的なモチーフで、ここに描かれたキリストが終末時における再臨のキリストであることをも表明し、復活の秘蹟を表現していると思われる。さらには、画面の下部において、二つの街から歩み始め、中央の神の仔羊に到達する羊たちの

行列表現は、当時の分裂した教会の状況を反映し教会の一致を示した図、と言えるのではないだろうか。

このように、「トラディティオ・レギス」図には、時代を反映した複数の意味が暗喩表現を用いて含有されており、それゆえに多くの種類の異なる作品に用いることができた。多くの人が集まる重要なバシリカに描かれていたからこそ、皇帝の娘の墓廟、聖遺物箱、石棺浮彫、カタコンベの壁画、金箔ガラスなどの作品に瞬く間に伝播していくことが可能となったのであろう。伝播した先では、必ずしも元々の複数の意味合いを有していたわけではなく、特に石棺上では、アナスタシス表現と入れ替え可能な、キリスト讃美という普遍的な意味を獲得することになる^{xlix}。

【註】

- i ペトロの墓に関する証言で最も古いものは、エウセビオス『教会史』、2章25における、200年ごろのガイウスなる人の言葉であり、そこには、ヴァティカンにペトロの、オステイエッセ街道にパウロの「勝利の碑（トロフェウム）」がある、と記されている。
- ii この論文に先立ち、拙稿、「旧サン・ピエトロ聖堂のアプシス装飾―「トラディティオ・レギス」図を巡って―」、加藤磨珠枝編、『教皇庁と美術』、竹林舎、2015年、81-104頁があるが、そこで触れることができなかったサン・ピエトロ聖堂、アプシス周辺の銘文と建築年代についてここでは重点的に扱うことにする。なお、本稿は2015年12月第15回新約聖書図像研究会での発表に基づくものである。
- iii L. Duchesne, *Le Liber pontificalis : texte, introduction et commentaire*, 1886, Paris (以下LP), I, 176.
- iv R. Krautheimer, *Corpus Basilicarum Christianarum Romae* (以下Corpus), V, Città del Vaticano, 1980, pp. 171-285.
- v ノラのパウリヌス、*Ep.*, XIII, 11, 13 (PL, 61, coll., 213-).
- vi LP, I 176, *Inscriptiones Christianae Urbis Romae, Nuova serie* (以下ICUR, NS.), II, 4093.
- vii エウセビオス『コンスタンティヌスの生涯』(秦剛平訳、京都大学出版会、2004年)、30章以下。

-
- viii R. Gem, From Constantine to Constans, The chronology of the construction of Saint Peter's basilica, in ed. R. McKitterick, J. Osborne, C. M. Richardson and J. Story, *Old Saint Peter's Rome*, Cambridge, 2013, pp. 35-64., spec. p. 62.
- ix ICUR, NS., II. 4092. P. Liverani, Costantino offre il modello della basilica sull'arco trionfale, in ed. M. Andaloro, *L'orizzonte tardoantico e le nuove immagini 312-468*, Milano, 2006, pp.90-91; Gem, op. cit., p. 39.
- x Gem, op. cit., pp. 38-40.
- xi ICUR, NS., II. 4095. 銘文と共に描かれた壁画は、バシリカ（の模型）をキリストとペトロに捧げるコンスタンティヌスである。cf. D. Giacobacci, *De Concilio tractatus*, Romae, 1537, p. 783.
- xii R. Krautheimer, The building inscriptions and the dates of construction of Old Saint Peter's: a reconsideration, *Römisches Jahrbuch der Bibliotheca Hertziana* 25 (1989), pp. 1-23.
- xiii P. Liverani, Saint Peter's, Leo the Great and the leprosy of Constantine, in *Papers of the British School at Rome*, 76 (2008), pp. 155-172.
- xiv M. Guarducci, *La capsella ebrunea di Samagher*, Trieste, 1978, pp. 117-253.
- xv Gem, op. cit., p. 41.
- xvi ICUR, NS., II. 4094.
- xvii R. Krautheimer, A note on the inscription in the apse of old St. Peter, in *Dumbarton Oaks Papers* 41 (1987), pp. 317-320.
- xviii S. de Blaauw, *Cultes et decor: Liturgia e architettura nella Roma tardoantica e medievale: Basilica Salvatores, Sanctae Mariae, Sancti Petri*, 2voll. Città del Vaticano, 1994, pp. 458-459.
- xix P. Liverani, Camerae e coperture delle basiliche paleocristiane, in *Mededelingen van het Nederlands Instituut te Rome*, 40/41 (2001/2002), 2003, pp. 13-27; Id., L'edilizia costantiniana a Roma: il Laterano, il Vaticano, Santa Croce in Gerusalemme, in cura di A. Donati, G. Gentili, *Costantino il Grande: la civiltà antica al bivio tra occidente e oriente*, Milano, 2005, pp. 74-81, spec. pp. 77-78.
- xx < Fecit autem et cameram basilicae ex trimma auri fulgentem > (LP, I, 176) . 文中の camera の語の解釈に関しては諸説ある。
- xxi J. Ruysschaert, L'inscription absidale primitive de S. Pierre: texte et

contextes, in *Rendiconti Pontifica Accademia Romana di Archeologia*, 40 (1968), pp. 171-190.

xxii Krautheimer, *Corpus*, V, p. 178.

xxiii Krautheimer, op. cit., 1987.

xxiv Liverani, op. cit., 2005, p. 78.

xxv Krautheimer, op. cit., 1987.

xxvi Krautheimer, *Corpus*, V, p. 177.; Baronio, *Annales Ecclesiastici*, III, Roma, 1594.

xxvii Gem, op. cit., pp. 42-44.

xxviii コンスタンス1世の治世下には、トリニアやアクイレイアの大教会の建築が行われている。興味深いことにトリニアには343年、アクイレイアには345年、アレクサンドリア司教アタナシオスが皇帝を訪ねている。両教会とも、アタナシオス滞在後に聖堂建築が活発化しているため、ジェムは後述するローマへのアタナシオスの滞在（341年）に続いて聖堂が整備されたとする。

xxix LP, I, 204.

xxx LP, I, 239.

xxxi LP, I, 329.

xxxii 名取四郎、「ヴァティカンの聖ピエトロ大聖堂のアプシス・プログラム論-1- インノケンティウス三世時代制作のアプシスのモザイクについて」、『美術史研究』（早稲田大学美術史研究会）、13（1976）、p1-30.

xxxiii アプシス周辺の模写は以下6点が残される；Archivio S. Pietro, Album ter64, fol. 50; Cod. Vat. Lat. 5408, fol. 29v.-30r.; Cod. Vat. Lat. 5408, fol. 31v.-32r.; Cod. Barb. Lat. 2733, fol. 158v.-159r.; Cod. Vat. Lat. 11988, fol. 209; Cod. Barb. Lat. 4410, fol. 27r.

xxxiv この項の記述は以下を参照。マルー（上智大学中世思想研究所編訳）『教父時代』平凡社、1996年；関川泰寛『アタナシオス神学の研究』教文館、2006年；ジョーンズ（戸田聡訳）『ヨーロッパの改宗、コンスタンティヌス<大帝>の生涯』教文館、2008年；ブルクハルト（新井靖一訳）『コンスタンティヌス帝の時代』筑摩書房、2003年。

xxxv 関川、前掲書、155頁以下。

xxxvi 現時点での作例リストは以下の文献に詳しい。R. Cousin, *The Traditio Legis: anatomy of an image*, Archeopress Archaeology, 2015.

xxxvii 巻物の授与という行為はローマ帝国の宮廷内で実際に行われていた儀式に依拠していると考えられており、宮廷では皇帝が臣下を属州に送る際、

皇帝権威の委譲を意味する儀式として行われていた。宮廷内の巻物の授与の儀式場面が描かれた作例としては、テオドシウス皇帝のミッソリウム（マドリッド、王立アカデミー所蔵、370年ごろ）が挙げられる。拙稿、前掲書、86-87頁。

xxxviii 例えば、銘文中の Dat という語を皇帝の施しである Largitio と結びつけて解釈した。「トラディティオ・レギス」図の巻物上に残された銘文は以下の通り。(1) DOMINVS LEGEM DAT；ナポリ、大聖堂付属洗礼堂、天井モザイク壁画、サン・ジェンナーロのカタコンベ、cub. A47（キリスト坐像）(2) DOMINVS LEGE DAT；アド・デチムムのカタコンベ、ピアートルの墓室、オハイオ州トレド美術館所蔵の金箔ガラス (3) LEX DOMINI；ヴァティカン博物館、ムセオ・サクロ蔵、ガラス片、(4) DOMINVS；ヴァティカン博物館、ムセオ・サクロ蔵、金箔ガラス (5) DOMINVS PACEM DAT；コンスタンティナ廟堂、南側小アプシス、モザイク壁画。1858年の G. de Saint-Laurent, *Le chemin de la Croix au point de vue de l'art chrétien*, *Revue de l'Art Chrétien*, 以来 1959 年の W. N. Schumacher, “Dominus Legem Dat”, in *Römische Quartalschrift*, 54 (1959), pp.137–202 までの研究はこの言葉の解釈に重点を置いて図像解釈を行うものが主流であった。

xxxix J. Kollwitz, Christus als Lehrer und die Gesetzesübergabe an Petrus in der konstantinischen Kunst Roms, in *Römische Quartalschrift*, 44 (1936), pp. 45-66; Y. M. J. Conger, Le thème du «don de la Loi» dans l'art paléochrétien, in *Nouvelle revue théologique*, 94 (1962), pp.915-1033, spec. pp. 915-933; Krautheimer, op. cit., 1987, p. 320.

xl C. Davis-Weyer, Das Traditio-legis-Bild und seine Nachfolge, in *Münchener Jahrbuch der bildenden Kunst* 12 (1961), pp. 7-45.

xli F. Nikolasch, Zur Deutung der “Dominus-legem-dat”-Szene, in *Römische Quartalschrift* 64 (1969), pp. 35-73.

xlII F. Bisconti, Variazioni sul tema della ‘Traditio Legis’. Vecchie e nuove acquisizioni, in *Vetera Christianorum*, 40 (2003), pp. 251-270, spec. p. 266; K. Yamada, Il sarcofago “di Stilicone” : note sulle scene con il collegio apostolico e con la Traditio Legis, in *Kwansei Gakuin University humanities review*, 16 (2012), pp. 15-28.

xlIII Ch. Pietri, *Roma Christiana*, Rome, 1976, pp. 1414-1427.

xlIV Guarducci, op. cit.; 近年の研究としては、D. Longhi, *La capsella ebrunea di Samagher: iconografia e committenza*, Bologna, 2006.

xlV Guarducci, op. cit. 一方でラテラノの司教座聖堂の内部装飾であると

主張する研究者もいる。T. Buddensieg, *Le coffret en ivoire de Pola, Saint-Pierre et le Lateran*, in *Cahiers archéologiques*, 10 (1959), pp. 157-195.

xlvi 13世紀のキリスト像が坐像であるため、ここにかつて描かれた4世紀のモザイク壁画の主題がマイエスタス・ドミニであった、とする研究者も一定数存在する。A. Iacobini, *Il mosaico absidale di San Pietro in Vaticano*, in ed. M. Andaloro, A. Ghidoli, A. Iacobini, S. Romano, A. Tomei, *Fragmenta Picta, Affreschi e mosaico staccato del Medioevo romano*, Roma, 1989, pp. 119-130; H. Brandenburg, *Le prime chiese di Roma IV-VII secolo*, Milano, 2004, p.98.

xlvi 司教リベリウスは、355年に追放される前、352年から354年にクリスマスのミサをサン・ピエトロ聖堂で行なっていることから、いずれにせよ、この時までには聖堂装飾は出来上がっていた可能性が高い、とジェムは指摘する。

xlvi 実際、「トラディティオ・レギス」図を有する石棺がいくつもこの聖堂周辺で発見されている。拙稿、2013、96頁、註74、75。

xlix Yamada, *op. cit.*, pp. 22-24.